

日蓮大聖人御書全集

うえのどののははごぜんごへんじ

上野殿母御前御返事

だいしようにん おんやまい こと

（大聖人の御病の事）

新版
1926
〜
1927

うえのどののははごぜんごへんじ だいしようにん おんやまい こと

上野殿母御前御返事（大聖人の御病の事）

こうあん ねん がつ にち

弘安 4 年 ('81) 12 月 8 日 60 歳 上野尼 さい うえののあま

しんじよう うえのどののははあまごぜん

進上 上野殿母尼御前 日蓮 にちれん

のうまいいち 駄 せいじんひと 筒 にじゆう 提 乾 薑 一

乃米一だ、聖人一つつ二十ひさげか、かんこうひと

紙 袋 送 た そうら お

こうぶくろ、おくり給び候い了わんぬ。

所 様 前 々 もう 古 そうら

このところのよう、ぜんぜんに申しふり候いぬ。さては、

い ぶんえいじゆういちねんろくがつじゆうしちにち やま い そうら

去ぬる文永十一年六月十七日、この山に入り候いて、

ことしじゆうにがつようか やま い いっぽ

今年十二月八日にいたるまで、この山、出ずること一歩も

そらら はちねん あいだ 瘦 病 もう 齢 もう

候わす。ただし、八年が間、やせやまいと申し、としと申

年々 弱 ころ老 耄 そらら ことし

し、としどしに身ゆわく心おぼれ候いつるほどに、今年

はる 病 起 あき過 ふゆ 至 ひび

春よりこのやまいおこりて、秋すぎ冬にいたるまで、日々に

衰 よよ 勝 そらら じゅうよにち

おとろえ夜々にまさり候いつるが、この十余日はすでに

しよく 殆 止 そららうえ 雪 重 寒

食もほとうどとどまりて候上、ゆきはかさなり、かんは

責 そららう み 冷 いし むね 冷

せめ候。身のひゆること石のごとし。胸のつめたきこと

こおり

氷のごとし。

酒 温 差 沸 乾 薑

しかるに、このさけわたたかにさしわかして、かんこうを

食 き いちど 飲 そらら ひ むね 焚

はたとくい切つて、一度のみて候えば、火を胸にたくがご

とし。ゆ湯に入るに似たり。あせ汗にあか垢あら洗い、し滴づくにあし足を

濯 おんこころざし 嬉 思

すすぐ。この御志おんこころざしはいか一んがせんと、うれ涙しくおも浮い

そうろう 候 りようがん ところ一に、両眼涙より浮ひとつそうろうのな一んだを一うか一べて候。

ま真ことこぞや、まこぞことくがついつかや、去年故ごろうどのの九月五日、こ隠五郎殿一のか一くれ

にしむね打はい騒か指になり折けると数胸一うち一さ一わ一ぎ一て、ゆ一び一を一お一り一か一ず

えそうら候にかねんじゅうろくつきしひやくよにちえ過ば、すそうらでそうらに一二一箇一年一十六一月一四一百一余一日一に一す一ぎ一候一か。

それおんにはおん母音な信ればそうら御一お一と一ず一れ一や一候一らん。い聞かにたまき一か一せ一給一

わ降ぬゆきや降らん。ち散りはなし咲雪一も一ま一た一ふ一れ一り。ち一り一し一花一も一ま一た一さ一き一て一候一いき。

ふ降りゆきし降雪一も一ま一た一ふ一れ一り。ち散りはなし咲花一も一ま一た一さ一き一て一候一いき。

わぬ降やらゆきらん。ちり降し散雪一も一ま一た一ふ一れ一り。ちり散しはな花一も一ま一た一さ一き一て一候一いき。

むじよう

帰

聞

そつら

無常ばかり、またもかえりきこえ候わざりけるか。あら

恨

よそ

良冠者

うらめし、あらうらめし。余所^{よそ}にても、「よきかんざかな、

たま

おとこ

おとこ

幾瀬

よきかんざかな。玉のようなる男かな、男かな。いくせ、

親

嬉

思

見そつら

まんげつ

くも

懸

おやのうれしくおぼすらん」とみ候いしに、満月に雲のか

晴

やま

い

盛

はな

かれるが、はれずして山へ入り、さかんなる花のあやなく

風

散

浅

覚

そつら

かぜにちるがごとしと、あさましくこそおぼえ候え。

にちれん

しよ

労

ひとびと

おんふみ

ごへんじ

もう

そつら

日蓮は所ろうのゆえに人々の御文の御返事も申さず候

歎

そつら

筆

いつるが、このことはあまりになげかしく候えば、ふでを

執

そつら

久

世

そつら

とりて候ぞ。これも、よもひさしくもこのよに候わじ。

いちじよう べごろうどの 行 合 覚 そうろう はは 先

一定、五郎殿にゆきあいぬとおぼえ候。母よりさきに

見 参 そうつら はは 歎 もう 伝 そうつら ことごと

げんざんし候わば、母のなげき申しつたえ候わん。事々ま

もう きようきようきんげん

たまた申すべし。恐々謹言。

じゆうにがつようか

十二月八日

にちれん かおう
日蓮 花押

うえのどののははごぜんごへんじ

上野殿母御前御返事